

# キス魔サベージ

畑渚

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タッチボイスの「ん？んんん？」がキスされてるみたいだよね  
の一言から始まったミーム汚染

目次

## キス魔サベージ

プシューとよくわからない音をたててドアがスライドする。予定表を見れば、今日も仕事が詰め込まれている。頭が痛い。きつと今日も遅くまでこの部屋に閉じこもることになるだろう。

「おっはよー！アーミヤちゃん」

「おはようございますサベージさ……ん！んん！ぷはあ！いきなりやめてください！」

入った瞬間に目に入ったのは、アーミヤの唇を奪うサベージだった。

「ごめんごめん。ああ、ドクター！おっはよー」

サベージは元気に手を振りながら近づいてくる。3m、2m、1m

……、まだ近づいてくる。

「んー」

目を閉じ口をすぼめて、さらに近づいてくる。

「……ん？」

しばらく待ってもこないことに気がついたのか、コテンと首をかしげる。少しおくれて耳がふわりと揺れた。

「ああ、おはよう」

そつと唇にキスをすれば、ん、と満足そうに息を漏らした。

||||| 『キス魔サベージ』 |||||

発端は数日前の夜だった。

「ドクター、晩ごはんはどうする？」

そう来てきたサベージに適当に返したら、それじゃあ買い物に付き合ってとお誘いを受けた。

「ドクターとまたお出かけできるなんてね」

楽しそうに鼻歌を歌うサベージの後ろをついていく。

「他の人が見たら夫婦にみえたりするのかな」

よくて兄妹だろうなんて笑って返した。

「それ……気になるの？」

お酒のコーナーで立ち止まっていると、サベージは不思議そうに首をかしげてきた。

興味がないかといえば、そうでもない。しかし、自分が酒に強いのか、そもそも飲んでいたのでさえ、定かではない。一人で飲むのは危険だし、そもそも飲酒が許されるような職場でもない。

「なら……試してみよつか。アーミヤちゃんには内緒だよ？」

かごにいくつかの缶をいれて、会計に通した。

その日の夜、夕食を取り終わったあとだった。

「ではドクター、私はこれで失礼しますね」

「アーミヤちゃん、おやすみー」

「はい、サベージさんおやすみなさい」

ペコリと礼儀正しくお辞儀をして、アーミヤが食堂から出ていった。もうみな宿舎などに戻り、その場には自分とサベージのみが残っている。

「ドクター、しっかり冷えてるよ〜」

にやりと笑みを浮かべながら、冷蔵庫から缶をとりだす。簡単に盛り付けられたつまみとグラスで、食卓を彩った。

「それじゃあかんぱ〜い」

一杯目は普通だった。案外いけるのではないかななどと調子にのりながら、サベージと語り合っていたのをおぼろげに覚えている。

二杯目はすこし酔いを自覚していて、ペースを落としてつまみを多めに食べていた気がする。サベージはまだ元気なようで、となりの方へと席を移ってきてから楽しそうに飲んでいた。

三杯目は、すこし酒を薄めて飲んだはずである。疲れが眠気に急激

に変わってきたから、サベージにチェイサー用に水を頼んだところま  
では覚えている。

四杯目は……残念ながらほとんど記憶にない。ただし……

「ドクターは好きな子とかいるの？」

そんな話をしていたと思う。そんな話を、深夜に酒を入れた男女二  
人でしているからだろうか。目の前のサベージがやたらと魅力的に  
見えてしまっていた。

「ん？んんん？」

気がついたら、サベージに手を伸ばしていた。そして抵抗させる間  
も与えずに、そのつややかな唇を奪ってしまった。

「んん……ぷはっ！ちよつとドクター！」

無理やり離されてようやく、自分が何をしてしまったのか自覚して  
しまう。サツと血の気が引いて、酔ってふんわりとしていた意識が  
はつきりとしてくる。

「ああ！もうそんな頭を地面に擦り付けなくてもいいから」

謝っても謝りきれない。勢いとはいえ、本当にやってはいけないこ  
とをした。

「もう……、落ち着いたならいいよ。ほら、お茶」

謝罪の言葉を繰り返しながら、何の疑いもなくその液体を飲み干し  
た。

「ふふっ……」

サベージが、まるで先程のキスを思い出すかのように自らの唇をな  
ぞった。

ぐらりと視界が揺れる。膝に力が入らずに、崩れ落ちる。口の中に  
残った液体からする強烈なアルコール臭が、鼻から抜けていく。

「ふっふーん」

鼻歌まじりに抱えられると、ポケットを探られる。

「私は優しいからドクターを部屋まで届けてあげる」

そのあとの記憶はまったくいいほど残っていない。

|||||

「ドクター?どうかしたの?」

サベージが顔を覗き込んでくる。何でもないと言っていると、  
そっか……、と含みのある返事をする。

「じゃあ元気のおまじない」

そういって、今度はサベージのほうからキスをしてくる。あわてて  
アーミヤの方を見れば、ちょうど背中を向けていた。

サベージは人差し指を口に当てて軽くウインクをする。

まるで、アーミヤには内緒だよ、と言うかのように。